

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

## 病虫害発生予察情報について（送付）

令和3年度（2021年度）発生予報第7号を下記のとおり発表しましたので送付します。

## 令和3年度（2021年度）病虫害発生予報第7号（10月予報）

## I 気象予報：令和3年（2021年）9月23日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	20	70
	降水量	40	40	20
	日照時間	20	40	40

## II 【今後、注意すべき病虫害】

## 1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	やや多(+)	やや多～並(+)	気温高(+) 降水並～少(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 やや 少(-) 阿蘇市一の宮 やや少(-)
	カメムシ類	並	やや多	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並～少(+)	予察灯調査 合志市 シリアカメシ やや多(+) アサカメシ やや少(-)



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
チャ	カンザワハダニ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	御船町 並(±)
カン キツ	ミカンハダニ	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	果樹研予察 ほ 宇城市 少(-)
	緑かび病 (貯蔵病害)	並	並	—	—	気温高(+) 降水並～少 (-)	
果樹 全般	果樹 カメムシ類	並	並	—	カンキツ 並～少(-) ナシ やや少(-) カキ 並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	予察灯・フェロモ ントラップ <sup>®</sup> 調査 合志市 少 宇城市 少 天草市 少 (-)
夏秋 トマト	葉かび病	多	多	多(+)	やや多～や や少(±)	降水並～少 (-)	
	すすかび病	やや多	多	やや多(±)	やや多～や や少(±)	降水並～少 (-)	
	灰色かび病	並	並	並(±)	並(±)	降水並～少 (-)	



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	黄化葉巻病	並	やや多	黄化葉巻病 並(±) コナジラミ 多(+)	—	(コナジラミ) 気温高(+)	
イチゴ	炭疽病	並	並	並(±)	並～やや少 (-)	気温高(+) 降水並～少 (-)	
	ハダニ類	やや多	やや多	多(+)	多～並(+)	気温高(+)	
ウリ科 野菜	退緑黄化病	並	並	—	キュウリ 並 メロン やや多～並 (±)	(コナジラミ) 気温高(+)	粘着トラップ 調査 並(±) 保毒虫率調査 やや少(-)
冬春 果菜類	コナジラミ類	やや多	やや多	トマト 多 (+)	ナス やや多 キュウリ 並 メロン やや多～並 (±)	気温高(+)	
	アザミウマ類	並	並	—	ナス やや 多～並 キュウリ 並 (±)	気温高(+)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
野菜類 全般	ハスモンヨトウ	やや少	やや少	夏秋トマト並 冬春トマト並 イチゴ並 (±)	夏秋ナス並 夏秋トマト並 イチゴやや多～並 夏秋キャベツ並 露地キク並 (±)	気温高(+) 降水並～少(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 少 八代市 少 山都町 やや少 阿蘇市 一の宮 やや少 波野 少 (-)
	オオタバコガ	やや少	やや少	夏秋トマト並 冬春トマト並 (±)	夏秋ナスやや多～並 夏秋トマト並 イチゴ並 露地キクやや多 (+)	気温高(+) 降水並～少(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 少 八代市 少 阿蘇市 並 山都町 少 (-)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

## 2 予想発生量、根拠、対策等

### ◎大豆

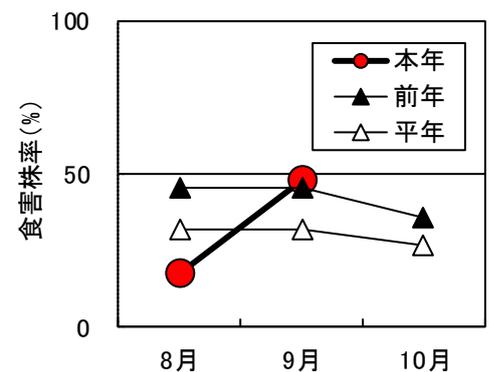
#### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、食害株率48.0% (平年31.9%)で平年比やや多の発生であった(+).

イ フェロモントラップによる9月第1から第4半旬の誘殺数は、合志市が896頭 (平年1547.3頭)、阿蘇市一の宮が758頭 (平年1039.8頭)で平年比やや少であった(-).

(3) 対策 ア 老齢幼虫には薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害による白変葉が認められる場合は薬剤散布を行う。



ヨトウムシ類食害株率の推移



2) カメムシ類 (ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ)

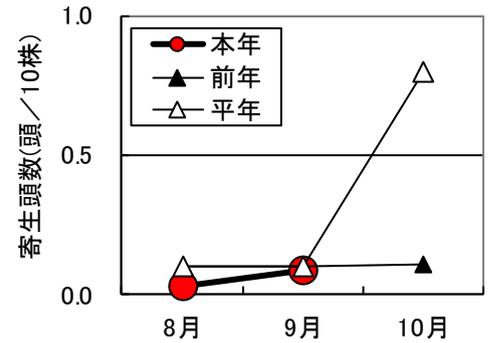
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、10株当たりの頭数は0.1頭(平年0.1頭)で、平年並の発生であった(±)。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯調査では、9月第1～第4半旬の誘殺数は、ミナミアオカメムシが112頭(平年26.8頭)で平年比やや多(+)、アオクサカメムシは7頭(平年25.1頭)で平年比やや少であった(-)。

(3) 対策 ア ほ場によって発生状況が異なるため、ほ場をよく見回り発生に注意する。発生を認めた場合、収穫前使用日数に注意し、子実肥大期に7～10日間隔で2～3回の薬剤防除を行う。

イ ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシに対するピレスロイド系薬剤の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。



カメムシ類寄生頭数の推移

◎チャ

1) カンザワハダニ

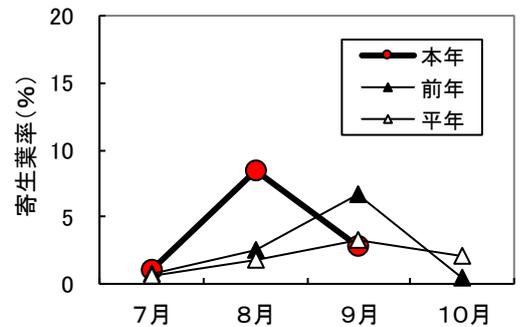
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、寄生葉率2.8%(平年3.2%)と平年並の発生であった(±)。

イ 茶業研究所(御船町)の9月第1半旬～第5半旬の調査では、寄生葉率3.2%(平年2.0%)で、平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 秋芽への被害は翌春の発生量や一番茶への影響が大きいため、葉層の内部やすそ部を観察し、発生が多い園では規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



カンザワハダニ寄生率の推移



◎カンキツ

1) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率 9.0% (平年3.6%)、寄生頭数 2.5頭/10葉 (平年 0.9頭/10葉) と平年比やや多の発生であった (+)。

イ 果樹研究所 (宇城市) の県予察ほ場では、9月第5半旬の雌成虫の寄生葉率2.0% (平年10.0%)、寄生頭数0.2頭/10葉 (平年1.6頭/10葉) と平年比少の発生であった (-)。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30~40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5~10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。

2) 緑かび病 (貯蔵病害)

(1) 発生量：並

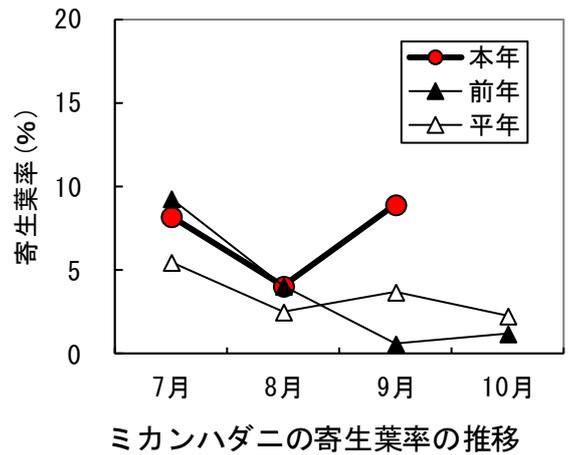
(2) 根拠 ア 8月の大雨及び9月の台風で傷果が発生し、本病の発生が助長されると推測される (+)。

イ 気象予報によると10月の降水量は平年並~少の予想である (-)。

(3) 対策 ア 園内の落果、樹上の裂果や腐敗果などは、伝染源となるので園外で処分する。

イ 収穫前の殺菌剤散布を徹底する。

ウ 収穫時には、果実表面に傷が付かないよう注意し、収穫当日は選果をしない。また、必ず予措を行う。



◎果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月第1半旬から第4半旬の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数は、合志市・宇城市・天草市で平年比少であった(－)。

イ 防除員報告では、9月の発生量はカンキツで平年並～やや少、ナシでやや少、カキで平年並であった(－)。

(3) 対策 ア 園内をよく見回り、早期発見および発生初期の防除に努める。なお、防除は夕方や早朝に行うのが有効である。

イ ピレスロイド系殺虫剤は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。

ウ 収穫期間近に薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページ (<http://www.jp.pn.ne.jp/kumamoto/>) を参照する。

各地域のカメムシ類の誘殺状況(9月第1半旬～第4半旬)

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)
合志市	38	271	14.0	6	21	28.6	42	120	35.0	0	2	0.0
宇城市 (松橋町)	836	1,936	43.2	6	70	8.6	382	864	44.2	0	11	0.0
天草市 (本渡町)	1,118	1,835	60.9	13	58	22.4	387	753	51.4	0	11	0.0

単位：頭、平年比(%)：(本年誘殺数/平年値)×100

◎夏秋トマト

1) 葉かび病

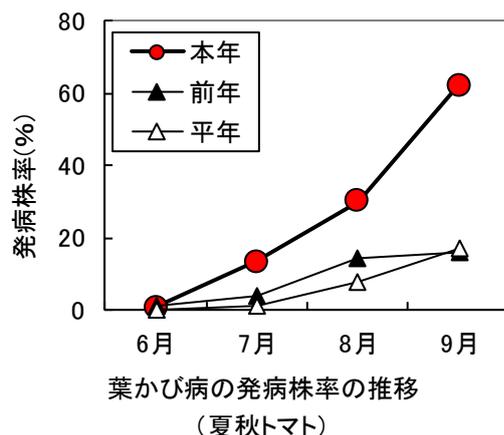
(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が確認され、発病株率62.3%(平年16.8%)で平年比多の発生であった(+)

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーションを行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jp.pn.ne.jp/kumamoto/>

## 2) すずかび病

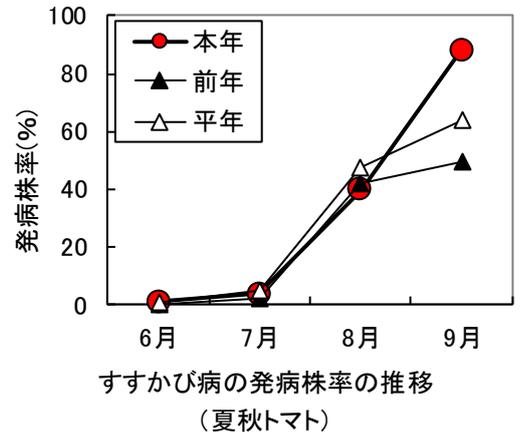
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が確認されたものの、発病株率88.0% (平年63.9%) で平年比やや多の発生であった (+)。

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う



## 3) 灰色かび病

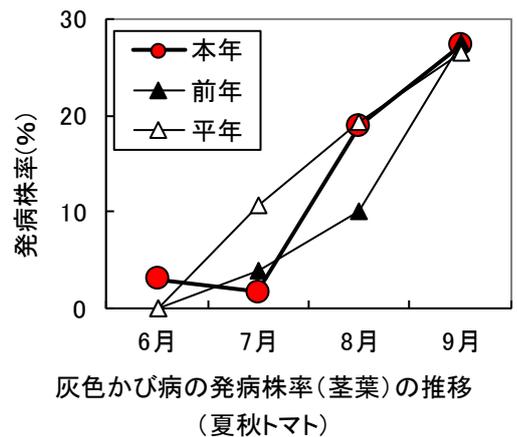
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、茎葉の発病株率27.3% (平年26.5%)、果実が0.3% (平年0.4%) で平年並の発生であった (±)。

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



## ◎冬春トマト

### 1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：並

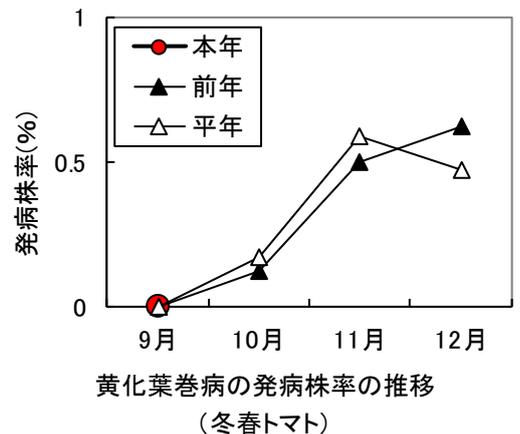
(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、発病株は確認されず (発病株率平年0.0%)、平年並の発生であった (±)。

イ 9月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率4.4% (平年1.5%) で平年比多の発生であった (+)。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する (3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内外の雑草は、タバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



## ◎イチゴ

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 天井ビニル被覆までに予防散布を行い、発生を抑制する（3 防除のポイント等の「イチゴにおける定植後の炭疽病及びうどんこ病の防除対策」を参照）。

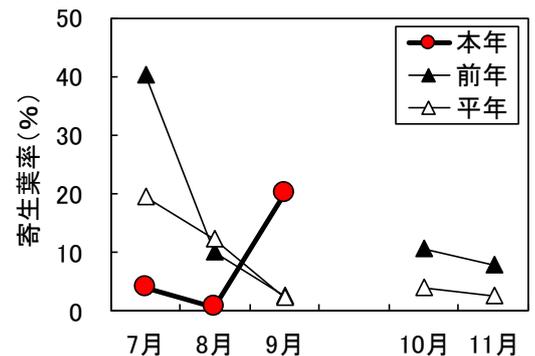
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

### 2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が確認され、寄生葉率20.0%（平年2.1%）で平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、天井ビニル被覆前に防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴではビニル被覆前にハダニ類の防除を徹底しましょう」を参照）。



ハダニ類の寄生葉率の推移(イチゴ)

(7-9月:育苗ほ 10-11月:本ほ)

## ◎ウリ科野菜

### 1) 退緑黄化病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 屋外に設置したコナジラミ類の黄色粘着トラップでの8月上旬～中旬の誘殺数は、平年並であった（±）。

イ 8月上旬～9月上旬に屋外で採集したタバココナジラミのウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）保毒率は、平年比やや少であった（-）。詳細は、令和3年9月24日付け発生予察技術情報第8号（[http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210924gi\\_jyutu.pdf](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210924gi_jyutu.pdf)）を参照する。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設内外の雑草は、タバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



## ◎冬春果菜類

### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、冬春トマトの寄生葉率4.4%（平年1.5%）で平年比多の発生であった（+）。

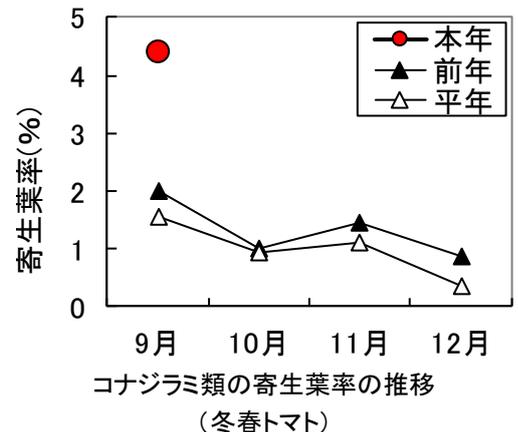
(3) 対策 ア 気温が高いうちは増殖しやすいため、現在発生しているほ場では、早期に防除する。

イ タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

ウ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



### 2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 9月の防除員報告では、夏秋ナスでやや多～並、秋キュウリで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 10月に入っても、施設内では発生が認められるので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、夏秋トマト、冬春トマト、イチゴでは寄生株は確認されず（寄生株率平年 夏秋トマト0.8%、冬春トマト0.1%、イチゴ0.5%）、平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる9月第1半旬～第5半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮・山都町で平年比やや少、合志市・八代市・阿蘇市波野で平年比少であった（-）。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

各地域のハスモンヨトウの誘殺状況（9月第1半旬～第5半旬）

市町村名（地域名）	本年	平年値	平年比（%）
合志市（栄）	961.3	2,026.2	47.4
八代市（鏡）	322.1	1,302.2	24.7
阿蘇市（一の宮）	899.6	1,251.0	71.9
山都町（鶴ヶ田）	80.7	122.9	65.7
阿蘇市（波野）	91.9	193.7	47.4

単位：頭、 平年比（%）：（本年誘殺数／平年値）×100

2) オオタバコガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 9月の巡回調査では、夏秋トマト、冬春トマトでは寄生株は確認されず（寄生株率平年 夏秋トマト0.1%、冬春トマト0.0%）、平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる9月第1半旬～第5半旬の誘殺数は、阿蘇市で平年並、合志市・八代市・山都町で平年比少であった（-）。

(3) 対策 ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



### 3 防除のポイント等

## 野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高い時期に活発に活動します。これから定植を行う作型では、育苗期や定植直後がウイルスに感染するリスクが高まる時期です。そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

#### 1 保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早ければ早いほど、経済的被害が大きくなるので、特に定植期の対策はしっかり行いましょう。

##### 本ほでの対策

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm（アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下）防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。また、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無い点検を行い、必要に応じて補修する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ほへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。

#### 2 保毒虫を「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、野外から侵入した微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 定植前に、登録のある薬剤を処理する。育苗期に処理ができていない場合には、定植時に登録のある粒剤を必ず処理する。
- (2) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (3) 施設内の雑草は、微小害虫の増殖源となるので徹底除去する。
- (4) 冬春トマトでは、野外からのコナジラミ類の飛び込みがほぼ無くなる時期（11月）に成虫に効果のある薬剤で防除を行う（令和2年度技術情報第17号「タバココナジラミバイオタイプQ成虫の薬剤感受性検定の結果」（[http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/210310gi\\_jyutu.pdf](http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/210310gi_jyutu.pdf)）を参照）。
- (5) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (6) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。



## イチゴにおける定植後の炭疽病及びうどんこ病の防除対策

### 1 炭疽病

定植後は降雨により保菌株からの炭疽病菌が飛散します。そこで、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 天井ビニル被覆までは予防散布を行う。
- (2) 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

### 2 うどんこ病

気温が高い時期には潜在感染し、菌そうが見えなくなっています。開花期までに防除を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 初期発見に努め、発病葉や不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (2) 開花期までに薬剤防除を徹底する。薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

## イチゴではビニル被覆前にハダニ類の防除を徹底しましょう

ビニル被覆後はハダニ類が増加しやすい環境となり薬剤による防除が難しくなるため、被覆前にハダニ類の発生を無くしましょう。

<防除対策>

- (1) ほ場周辺およびほ場内の雑草は、発生源となるため除去する。
- (2) ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているため、老化葉は薬剤防除前に必ず除去する。また、薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、丁寧に散布する。
- (3) 除草後の雑草や葉かぎ後の老化葉は、ほ場周辺に放置するとハダニ類がほ場内に再侵入するため、ポリ袋に詰めるなどして持ち出し適切に処分する。
- (4) ビニル被覆の1週間程度前に効果の高い殺ダニ剤を散布する。ただし、施設内の数ヶ所で発生が見られる場合は、事前に気門封鎖剤によって発生量を減らした上で散布する。なお、気門封鎖剤は高温時など薬害が生じやすい条件での使用は避ける。
- (5) 果実に薬害や汚れを生ずる恐れのある薬剤については、果実に影響の無い時期に使用する。
- (6) 天敵(チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ)を放飼する場合には、天敵への影響が残る期間を考慮し、薬剤の種類や使用時期に注意する。



### Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
イチゴ	うどんこ病	並	巡回調査は平年並(±)。 防除については、3 防除のポイント等の「イチゴにおける定植後の炭疽病及びうどんこ病の防除対策」を参照する。
秋メロン	べと病	並	防除員報告は平年並(±)。 初期発生を認めたら直ちに薬剤散布を行い、薬液が葉裏によく付着するよう丁寧に行う。
野菜全般	アブラムシ類	並	巡回調査はイチゴで平年比多、冬春トマトで平年並(+) ウイルスを媒介するので、防虫ネット等では場内への侵入を防ぐ。
露地キク	白さび病	並	防除員報告は平年並(±)。 罹病葉が伝染源となって感染が拡大するので、罹病葉は早めに除去し、適切に処分する。
<p><b>【野菜病害虫の共通対策事項】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。</li> <li>・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。</li> <li>・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。</li> </ul>			

### Ⅳ その他

#### 農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。  
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)  
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」